2023年10月25日発行

# 地域と協同の研究センターＮＥＷＳ

230号

## 三河地域懇談会の「豊橋生協会館へ　寄らまいかん」の交流広場にて

高橋正（愛知大学名誉教授、地域と協同の研究センター顧問）

私が話す機会を設けていただき、いくつかテーマも与えられましたが時間の制約もあることから東三河生協創立時の事と東京空襲について話すことにします。

### 東三河生協の創立の事情

我が国の経済は、昭和40年代に入ると高い成長プロセスを歩み始め、工場やコンビナートからの廃水、煤煙や農薬などによる環境破壊は激しさを増しこそすれ減る気配は見えませんでした。

利益優先、安全軽視は食料品製造分野でも同じで、BHC汚染牛乳、AF2添加豆腐やソルビン酸添加の竹輪など、農薬や危険な食品添加物などが含まれた様々な食品が食卓に乗るのが日常になっていました。

このような状況を憂い、安全・安心な食品を求め、より良い生活を築こうという運動が日本の各地で起こり、広がりを見せていました。

八木憲一郎さん、中島芳夫さんは他の2人の仲間とともに1971（昭和46）年春から豊川の諏訪団地や豊橋の金田住宅など市民のあいだを引き売りや共同購入で回るとともに、無農薬野菜の契約栽培、無調整牛乳の取り扱いなどを行い、生協づくりを訴える活動に取り組んでいました。生協設立については名古屋勤労生協（めいきん生協）の専務理事田辺さんに相談に行き、地元の愛大豊橋生協が支援の役割を担うのが良いとの助言をえていました。

愛大豊橋生協は発足（1967（昭和42）年10月）し購買事業と食堂を運営していましたが、まだ日が浅く余力が乏しい状況でした。しかも大変複雑で困難な状況に置かれていました。

当時、全国的に学生運動が非常に活発で、党派に分かれ頻繁にデモや内ゲバが引き起こされていました。愛大豊橋校舎も同様で、革マル派の自治会と生協の学生委員や支持者たちのあいだは緊張関係がありました。創立総会も9月に開いたが自治会の学生集団の妨害に会い流会になったという経過もありました。

教授会でも学生間の要求の違いや抗争がしばしば議論になることがあり、初代と第2代生協理事長を務めた2人の教授は１,２年で理事長職をはなれ私が第3代の任を負っていました。私は豊橋校舎2部（夜間部）の学生教務委員でしたので、昼夜の自治会間の抗争回避にも苦労していました。

このような状況の中で八木グループと愛大豊橋生協のコラボレーションがスタートしました。学内事情から設立発起人代表には生協専務の中村慎吾さんにお願いしました。発起人には豊橋、豊川両市の広い範囲から意欲的な女性が大勢名乗りをあげてくれました。

【２ページにつづく】

### 研究センター10月の活動

2日（月）研究フォーラム環境世話人会
3日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」③
5日（木）金城学院大学人間科学部「協同組合論」③
7日（土）～8日（日）第5回協同の未来塾（コープこうべ協同学苑）
9日（月）第5回常任理事会
10日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」④
11日（水）尾張地域懇談会
12日（木）金城学院大学人間科学部「協同組合論」④
14日（土）第5回地域共生フォーラム
16日（月）愛知の協同組合間協同連絡会（幹事会）
17日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑤
研究フォーラム地域福祉
19日（木）組合員理事ゼミナールオンライン世話人会
21日（土）第4回共同購入事業マイスターコース
24日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑥
26日（木）金城学院大学人間科学部「協同組合論」⑤
27日（金　組合員理事ゼミナール⑦
28日（土）金城学院大学人間科学部「協同組合論」フィールドワーク
三河地域懇談会「生協総研研究集会」パブリックビューイング
31日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑥

※　各行事は新型コロナ感染対策をとって実施しています。

目次

三河地域懇談会の「豊橋生協会館へ　寄らまいかん」の交流広場にて　高橋正　1
ささえあいの家訪問　3
防災ずきんをつくる会　報告　4
紛争地から逃れてくる人の難民としての認定について　5
情報クリップ　6
書籍紹介「毒の水」　8

【１ページからつづく】

東三河生活協同組合の創立総会の会場は豊橋市公会堂で開催されました。1974（昭和49）年3月12日です。260名の賛同者、500名を超える委任状参加者で熱気にあふれた会議でした。来賓には、日本生協連の役員、静岡、岐阜、愛知の地域生協の役員、組合員が大勢出席し、前途を祝し支援の意思を示してくれました。河合六郎豊橋市長の挨拶は生協への期待のこもったものでした。

八木さんと中島さんに愛大豊橋生協職員から原理久雄さん、鈴木義雄さん、鳥居正信さんが移籍し、専従は5人で出発しました。

**東京空襲の経験**

私は、自分の戦争体験を人前で語ったことはありません。今回語る気になったのは、戦後78年、戦争体験者はすくなくなり、語り伝える責任を今更のように感じるようになったからです。今日は時間も限られているのでごく一部を話させてもらいます。

昭和20年3月10日未明、警報、飛び起きたときすでに低い音を響かせ、探照灯に照らされ透けるような姿でB29の編隊が西方向に移動していく。真っ暗な狭い防空壕の中に母、姉、弟と共に体を寄せ合って入った。

しばらくするとあたりが明るくなった。壕をでてみると南の方は中天高く紅蓮の炎がうねり逆巻き金粉が舞っている。背中は冷たいが前側は熱く顔は火照っていた。私は中学1年生だった。

私が被災地域に入ったのは1週間ほどあとであった。深川で町工場を営んでいた親戚の伯母が一人だけ生き残り避難所にいることが分かり、その引き取りと焼跡の確認のため被災地に向かった。

私の家は東京の葛飾区の西はずれに位置している。西側を流れる荒川放水路(現荒川)にかかる長い堀切橋を渡ると向島の鐘ヶ淵という地域に出る。大きな紡績工場がある。

鐘ヶ淵を少し下り白髭橋に来ると目の前に焦土の原が広がり、はるかに国技館が見えた。焼け残ったようだ。向島と浅草の河岸には桜が多く、とりわけ東岸の隅田公園は墨堤と呼ばれ桜の名所であった。が、木々はすべて焼け焦げていた。

公園には溺死体が足の踏み場もないくらいに並べられている。その間を何人もの人が身をかがめ、覗きこむようにして動いている。身寄りを探しているのだ。川の中にはまだたくさんの溺死体が浮き漂っており、船や筏が出て集めている。

駒形橋から川沿いの道を離れ見渡す限り瓦礫の原となった街中を歩く。広い車道の両側の歩道にある避難壕には真っ黒に焦げた遺体が高く積み重ねられてある。特に、ライオン油脂本社のあたりがひどかった。

森下町の伯父の家の焼け跡で、父と伯母と合流し、焦土の原を眺めながら避難の時の状況などを聞いた。ふと気付くと、遠くの焼け野原の一点から黒い煙がもくもく長く流れ出した。燃やす木がないのでガソリンを使って遺体を荼毘に付しているのだ。その煙の方を見ていると、「この辺りに遺体は無いですか」と声をかけられた。遺体を探し収容している生き残った３人の警防団の人たちと見受けられた。団服にはあちこち焦げ跡があり、目の周りが紅く腫れあがって痛々しい姿でいる。「このあたりの人は皆さん立川町へ避難したので遺体はないでしょう」と伯母は答えた。立川町は少し前の空襲で焼け野原となった町で、近隣の多くの人はその焼け跡に避難して命を失った。伯母の家族もそこを目指して避難したが、伯母は人の流れにもまれて菊川小学校にたどり着き一命をとりとめることができた。

ところが警防団の人たちは、すぐ近くの橋際の交番脇の退避壕の中に遺体を見つけ出した。壕の覆土が取り除けられると座ったままの3体の遺体が現れた。真っ黒に塗られた坐像のようで、横にされると尻と足裏だけが茶褐色だった。

伯母は助かったが、菊川小学校でも多くの命が奪われた。体育館に避難した人たちは吹きこむ熱風を避けるため倒れた人の下に競って潜り込む、その結果蒸し焼きの人の山が築かれた。このことは伯母や地域の人たちから聞いた。

この空襲は、東京の下町一帯の民家密集地域をまず焼夷弾の火のバリアで包囲し避難路を絶ったうえでその中を猛爆するという計画的市民大量焼殺であったことが、戦後アメリカ側の資料で明らかになっている。

（時間の関係で、話せたのはこの一部でした）　　（たかはし　ただし）

## ささえあいの家訪問

井貝順子（岐阜地域懇談会世話人）

８月21日　岐阜地域懇談会世話人会メンバー９人は、各務原市八木山ささえあいの家を訪問しました。ささえあいの家は、人びとがつながってささえあう関係になる場です。市社協の拠点整備の助成制度を活用して、民家を借りて整備し、ささえあいの家としてオープンしたのが、2014年の１月９日、「困りごとをなんでも相談できる場（解決に向けて活動）」、「地域の人が寄り集まって仲良くなる場（サロン）」、「子育ての場」、「フレイル予防、介護予防の場」、「自己表現の場」「会議・打ち合わせ作業の場」として地域になくてはならない場となっています。

事務局清水孝子さんから、ささえあいの家の活動についてお話を聞いてきましたが、実際に活動―解決に向けて活動―している人たちの声を聴きたいという要望から、うかがいました。

清水さんのテキパキした司会によって、それぞれの方の活動が、報告されました。

・40年経過して具合が悪くなった給湯器を直した（元エンジニア、壊れたものを直すのは快感）
・要らなくなった大きなソファを処分した・・・大きすぎて外に運び出すまでに、家の中を行ったり来たりしたこと処分をお願いした方が作業しやすいように土足でも大丈夫なように家の中に青いビニールシートを事前に敷いておいてくださった
・庭の草取り・・・暑さ対策のため早朝６時から作業をした、88歳の依頼者も一緒に作業をされた
・居間のフローリングの張り替え、居間が綺麗になったら廊下の汚れも気になって、廊下はワックスがけして綺麗に
・ささえあい畑―ささえあいの家から活動はどんどん広がって、開墾して畑まで作られました―の手作業の水やりから給水設備を工夫して自動化、ユニークなイノシシ対策の成果（電柵ではない）

とても大変な話が、大変だった！！という苦労話ではなくて、なんだか楽しいおとぎ話みたいに聞こえてくるのが不思議です。ささえあいの活動の成果を見て、依頼した方から「まだ元気で頑張れる」「もうちょっと長生きしたい」などの前向きな声がうまれたことが紹介されて、その困りごとの解決が、目の前の困ったことの解決に終わるのではなく、生きる意欲につながっていることが伝わってきました。自分の困りごと解決のために、目の前で真剣に取り組んでくださる姿を見ることは、地域で大切にされている自分に気づくことができる機会ではなかったでしょうか？お金を出して、業者に頼めば解決できることが、地域の仲間の手助けによって、なしとげられるその時間を、共有することが大切だと気づかされました。

話されている間にも、補足があちこちからされて、いい雰囲気です。心が通い合った仲間！という関係性の気持ちよさが、初めて聞く私たちにも、しみじみと伝わってきました。住民同士がささえあうことで、うまれる気持ちの良いくらし、仕事を定年退職した後も、地域のため、人のために働き続けておられる姿に率直に感動しました。そして、人から感謝されるということが、生きがいや、やりがいにつながることが、よくわかりました。

この会のために、仲間の方がわざわざ手作りのデザートを用意してくださいました。また、ささえあい畑で実った大きなスイカ、パワーポイントで紹介されて、「大きい！！」と、感嘆していたら、そのスイカもデザートとして、味あわせていただきました。参加した世話人からは、「自分の地域ではここまではできないけれど、何かしたい！」という気持ちが、沸きあがりました。

（いかい　じゅんこ）

三河地域懇談会主催　　報告：伊藤小友美（事務局）

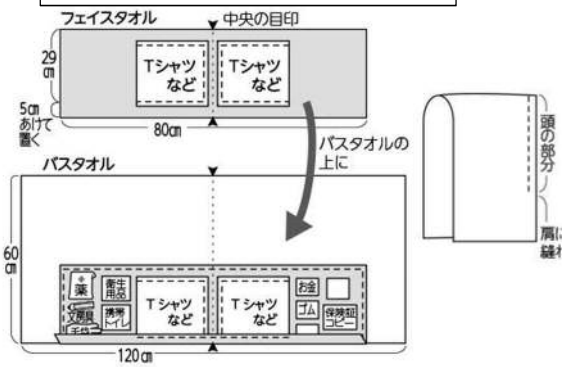
# 防災ずきんをつくる会　報告

９月２３日（土）、７名の参加で、「防災ずきんをつくる会」を開催しました。三河地域懇談会では防災についてはさまざまな学習会を行ってきました。念願の防災ずきんをつくることができて参加者みんな感激しました。講師は三河地域懇談会世話人の田所登代子さんです。当日、あらためて学んだ「イツモ防災」のお話と防災ずきんについて紹介します。

防災ずきんは、災害に備えるために常時枕元に置く「枕元セット」の中に入れるもので、いざという時に頭を保護します。家を出て避難所にたどり着くまで頭を守り、避難所に着いてからはほどいて、縫い付けてあるＴシャツや手袋、靴下などを使います。中に縫い付けるものは、人によって違いますし、季節によっても違います。できれば夏用と冬用を用意したいものです。コロナ感染症の予防のためには、マスクやアルコールシートも必須です。

「枕元セット」には、防災ずきんの他に懐中電灯（電池を時々確認しておく）と足元を守る厚底のスリッパか履きやすい靴を入れましょう。「枕元セット」のほかに「非常持出袋」を一人ひとつ用意しましょう。「非常持出袋」には、一日分の食べもの、水（２本必要）を入れます。携帯トイレや小銭、雨合羽（防寒にも雨除けにもなる）、ホッカイロ（おなかの調子が悪いときにもいい）、レスキューシートがあると役に立ちます。保険証の写しや常備薬も入れましょう。

防災ずきんの中身↑↑




**＜防災ずきんのつくり方＞**

①フェイスタオルにＴシャツや手袋、靴下などを縫い付けます。縫う間隔は３ｃｍほど、しつけ糸でざっくりと縫い後でほどきやすいようにします。
②バスタオルを広げて、フェイスタオルを縫い付けます。
③バスタオルを半分に折り、まわりを縫います。
④中心で折り、後ろ半分を頭の長さに合わせて縫い合わせます。
⑤テープを後ろに縫い留めて、顔の前で結べるようにします。

**＜参加者の感想＞**

・楽しく学習できました。非常持出袋の中身をもう一度点検しようと思います。
・防災ずきんを実際につくれてよかった。頭を守るためのもので個人の必需品を持ち出すには最適だということを学べました。

・本当にこれを使用することはないと信じていますが、もう一つ主人用に作っておけば良いと思います。日ごろ、防災グッズを用意しておかなければと思いつつなかなかできずにいました。あらためて点検をして準備しておこうと思いました。

**三河地域懇談会では「イツモ防災」を合言葉に、防災の取り組みをこれからもすすめます。みなさんも、ぜひ防災ずきんをおつくりください。**

（いとう　こゆみ）

## 紛争地から逃れてくる人の難民としての認定について

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

ウクライナ避難民入国者数は、10月11日現在で、2,523人となりました。東海地域では、三重県1人、岐阜県14人、愛知県118人です。

東海地域ではウクライナ避難民の方達へ、さまざまな支援が行われています。9月にはシャンソンコンサートへの招待があり、10人が参加をしました。コンサートでは避難民の方達は体を動かしたり、涙を流したりして聴かれていたそうです。戦争が始まって以来、音楽を聴けなくなってしまったという方も、コンサートを楽しむことができたと話されたと同行したスタッフから伺いました。10月にはウクライナの楽器バンドゥーラのコンサートや、和太鼓のコンサートへの招待がありました。またグランパスからはサッカーの試合への招待があり避難民16名が参加しました。試合前には募金活動も行い、その後、サッカーの試合観戦を楽しみました。（募金活動についてはグランパスのウェブサイトにも掲載されています）株式会社ニトリホールディングスは、ウクライナ避難民へ毎月8万円（20歳未満は4万円）の生活費支援を開始し、避難民の方達の生活費支援申し込みの手続きが進んでいます（詳細はニトリのウェブサイトに掲載されています）。コープあいちは、名古屋市の支援登録制度に登録し、食品の提供や家具家電の輸送支援を継続して行なっています。あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワークの事務所が置かれている名古屋市東区にあるレスキュー・ストックヤードの事務所には定期的に企業や支援者から多くの物資や食料の寄付が届けられています。

寄付、ご支援は ukraine@rsy-nagoya.com へご連絡ください。

現在、ニーズがあるのは次のものです。

- 生活用品：洗濯用洗剤・シャンプー・ボディソープ・石鹸・フェイスタオル・ボディクリーム・おりものシート
- 食品：ウクライナ料理に使いやすいい中力粉、コーヒー・紅茶
- 家具：冬用掛け布団/カバー・シングルベット/カバー・レースカーテン・衣装ケース・チェスト（収納・扉付）・鍋（大・小）・踏み台・室内用洗濯物干し・ランドリーラック・ゴミ箱
- 家電：2つロガスコンロ・オーブンレンジ・電気ストーブ・テレビ・ミシン・ブレンダー・パンニーダー
- 自転車：大人用・子ども用・三輪車
- 文房具：ノート・消しゴム・ボールペン

日本政府は、9月26日、紛争地から逃れてきた人たちを「準難民」として認定して受け入れる制度を、12月1日に施行すると閣議決定をしました。準難民として認定されると「定住者」の在留資格が付与され、就労制限なく働くことができるようになります。「定住者」の在留資格は日系3世、日本人の配偶者の未成年未婚の実子などに認められる在留資格で、在留期限はありますが、安定した身分になります。これまで、日本の入管法は難民の認定に関して、迫害を受ける恐れがある人に限定しており、紛争地から逃れてくる人は難民としての認定がなかなかされず、国際的にも批判されていました。10月6日に行われた法務大臣閣議後記者会見では、「ウクライナからの避難民への支援に関する質疑について」の中で、「少なくとも我が国では、補完的保護対象者の制度をしっかりと施行していって、そして支援についても、おおむね現在の難民の方々への支援と同程度の内容にする方向で関係省庁と今調整をしている」と回答がされています。2024年4月からは、補完的保護対象者とその家族のための「定住支援プログラム」が始まります。定住支援プログラムは、日本語教育と生活ガイダンスを組み合わせたカリキュラムになっており、45分の授業を①日本語教育　572授業時限②生活ガイダンス　120授業時限行うことになっています。日本語教育は、読む、書く、聞く、話すの基礎力を伸ばす、生活ガイダンスは防災やゴミ出しのルール、医療、保険、年金、税金、健康管理など日本で生活するために役立つ制度や習慣について勉強することができる、とされています。

しかし、「補完的保護」については、「紛争から逃れた人は、補完的保護でなければ保護されないというのは、本来の難民保護のあり方を踏まえない、誤った見解であり、難民として保護されるべき人が保護される制度が確立されることが必要である」という意見もあり、この補完的保護の制度の導入について私たちは慎重に見ていく必要があります。

参考：難民支援協会ウェブサイト https://www.refugee.or.jp
出入国在留管理庁ウェブサイト https://www.moj.go.jp/isa/support/fresc/12_00122.html

（かんだ　すみれ）

# 情報クリップ

## co･opnavi　2023.10　No.857
### 時代の変化に対応する持続可能性を考えた商品づくり
日本生活協同組合連合会　2023 年 10 月　Ａ４判　32 頁　363 円（消費税込）

＜私たちの「この一枚」＞
　生協まつり
　　わかやま市民生協　経営管理グループチーフ　西田　史
特集
時代の変化に対応する持続可能性を考えた商品づくり
＜今日も笑顔のコープさん　生協の仲間のお仕事拝見＞
　なのはな生協
＜想いをかたちに　コープ商品＞
　ＣＯ・ＯＰ北海道のつぶコーン
＜生協大好きママ コプ山さんの 教えて！ＣＯ・ＯＰ商品＞
　ＣＯ・ＯＰ塩かずのこ　／　ＣＯ・ＯＰ味付数の子
＜組合員に支持される店つくり・売場づくり＞
　コープやまぐち
＜日本全国　宅配現場におじゃまします！＞
　ならコープ
＜地域に安心を届ける生協の安全運転の推進＞
　京都生協
＜組織を支える縁の下の力持ち＞
　おかやまコープ
新連載＜紫乃ママに聞いてみよう！＞
　株式会社ヒキダシ　木下紫乃さん
＜この人に聴きたい＞
　歌謡コーラスグループ　　純烈
＜ほっと navi＞
　コープみらい　／　大阪いずみ市民生協

## 生活協同組合研究　2023.10　VOL.573
### 子育て支援の現状と今後の展望
公益財団法人　生協総合研究所　2023 年 10 月　B5 判　68 頁　定価 550 円（消費税込）

巻頭言
　子どもや若者の居場所　　天野恵美子
特集　子育て支援の現状と今後の展望
子育てをめぐる孤立と孤独　　宮本みち子
深刻化する子育ての孤立と解決のカギ
　―少子化対策を超えて、全ての親と子を支える「共同養育」の社会へ―　　榊原智子
子育て支援における IT 機器
　・SNS 利用の意義と可能性　　石井クンツ昌子
地域づくりとしての育児の「協同」
　―ケアリング・デモクラシーをめぐる世田谷の実践　　相馬直子・松田妙子
「生活の協同」としての保育
　―戦後初期における東京自由保育園の事例から―　　三浦一浩
■国際協同組合運動史　（第 19 回）
　国際協同組合同盟（ICA）
　1930 年第 13 回　ウィーン大会②　　鈴木　岳
■本誌特集を読んで（2023・8）　　小野　一
●アジア生協協力基金 2024 年度・助成金一般公募のご案内
●公開研究会「今改めて共済のアイデンティティを考える」10／16
●第 32 回全国研究集会
「世界的な食料危機の中で、持続可能で健康的な食のあり方と生協の役割を考える」　10／28
●公開研究会「英国とフランスの協同組合の要人より
　～E.O.グリーニング没後 100 年と
　G.フォーケの生誕 150 年を記念して～」　12／20

## 文化連情報　2023.10　No.547
### 「文化と厚生」を掲げ続けて～創立 75 周年にあたり～
日本文化厚生農業協同組合連合会　2023 年 10 月　B5 判　64 頁　文化連情報編集部 03-3370-2529＊注

農協組合長インタビュー　(91)
魅力ある事業を展開し組合員の加入を促進　　中村良祐
「文化と厚生」を掲げ続けて
　～創立 75 周年にあたり～　　東　公敏
厚生オンラインカレッジを活かした
　職員教育の充実化について　　伊藤幸夫
医薬品制度の改善要請について
　厚生労働省と意見交換　　佐治　実

**日本文化厚生連「第 75 回会員厚生連常勤役員・参事会議**
**令和 5 年度第 1 回会員単協常勤役員・参事会議講演要旨**
孤立・困窮・不安の時代に地域づくりをどう進めるか
—協同組合への期待—　宮本太郎
**協同精神のリレー　(7)**
イチローの MLB デビュー　伊藤澄一
**アメリカの医療政策動向　(35)**
医療制度改革の争点—バイデノミクス CHOICE 法案
髙山一夫
**変わる日本のまちづくり　(40)**
障害者就労の推進と
地場産業を考える社会福祉法人の歩み
—古平福祉会の取り組み①
杉岡直人　・　畠山明子
**多様な福祉レジームと海外人材　(65)**
冷戦最前線の島：台湾金門島
安里和晃
**臨床倫理メディエーション　(67)**
ハラスメントを考える①　— 修復的正義の観点から
中西淑美
**熱帯の自然誌（91）**繊維作物　安間繁樹
**デンマーク＆世界の地域居住（171）**
バスターミナルに「なりわい」の拠点を！
「hocco」（東京都武蔵野市桜堤）　松岡洋子
▼線路は続く　(179)
阪神なんば線で夢の舞台へ　西出健史

**にじ　2023　秋号　No. 685**

## 地域医療と協同

**一般社団法人日本協同組合連携機構　2023 年　B5 判　120 頁　1,100 円　（税込）**

**オピニオン**
○「協同労働って何ですか？」
～この問いが飛び交うことの意味　田中夏子
（農・協同組合研究者）
**特集企画　地域医療と協同**
○特集解題　大高研道（明治大学　教授）
○地域医療と非営利・協同組織
高山一夫（京都橘大学　教授）
○死を受け止める地域社会の良心
早川佐知子　（明治大学　准教授）
○健康づくりから地域づくりに至る回路と課題
—秋田県旧上郷村における宮原伸二医師の取り組みから—
宮﨑隆志　（北海道大学　名誉教授）
○医師不足に立ち向かう秋田鹿（か）角（づの）の住民運動
—「住民の証言」は協同の起点—　鈴木土身
（秋田県・鹿角の医療福祉を考える市民町民の会
広報・地域調査等担当事務局）
○グラデーション豊かな協同でつくる地域医療
—コ・プロダクションを手掛かりに—　江本淳
（日本医療福祉生活協同組合連合会会員支援部課長）
○医療生協さいたまの地域医療・地域社会との協同
竹野政史（明治大学大学院　博士後期課程）
○地域包括ケアに取り組む
岡山医療生協の現状と課題
和田博知　（岡山医療生活協同組合　副理事長）
○JA 岐阜厚生連における地域医療課題への取り組み
谷口直樹
（岐阜県厚生農業協同組合連合会　代表理事理事長）
［連載］協同組織金融と地域振興
○協同組織金融による地域連携－城南信用金庫の取り組み－
川本恭治（城南信用金庫　理事長）
○協同組織金融と地域再生　－秋田県信用組合の挑戦－
北林貞男（秋田信用組合　会長）
［書評］
駒村康平編著、諸富徹編著、全労済協会編著
『環境･福祉対策が産み出す新しい経済
－“惑星の限界”への処方箋』2023 年　（岩波書店）
田中夏子　（農・協同組合研究者）
斉藤弥生 ヴィクトール・ペストフ著
『コ・プロダクションの理論と実践
－参加型福祉・医療の可能性』
2023 年　（大阪大学出版会）　伊丹謙太郎
（法政大学連帯社会インスティテュート教授）
編集後記　阿高あや　（編集主幹）

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✤)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

## 書籍紹介

## 熊崎辰広会員からの書籍紹介

**毒の水**—PFAS 汚染の立ち向かったある弁護士の 20 年

ロバート・ビロット著　旦佑介訳　出版社：花伝社　発行：2023 年 4 月

価格 2.500 円+税

### 熊崎辰広会員からの紹介

今年 7 月 23 日、各務原市は 2020 年 11 月の検査で市内 75,000 人に水を供給している三井水源地から PFAS 濃度が暫定基準値 50ng/ℓを大きく超えていたことを発表。その問題で、住民運動が生まれている。

この PFAS とは何か。有機フッ素化合物の総称で、47,000 以上の化合物があり、このうち炭素の数は 8 個のものを PFOS または PFOA といい、これが人や動物にかなりの毒性を示すことと、その汚染源の中心に、自衛隊や米軍基地で長年使用されてきた(現在は使用禁止)泡消火剤（これの成分が PFOS,PFOA）であったことで、全国的な問題の広がりがあり、愛知県の豊山町でも小牧基地が汚染源とされ、住民運動も生まれている。

この PFAS を最初に発見、製造をはじめたのがアメリカデュポン社。はじめは製造ラインに従事する職員の異常（体調不良や異常出産等々）から始まり、毒性検査を行っているが、そのデータは公開されなかった。1998 年、飼っている牛がつぎつぎと異常死となることから、デュポン社の敷地内にある廃棄物の埋め立て地を疑い、農場主の訴えを受けて著者で弁護士のロバート・ビロットの長くつらい忍耐力のいる、弁護士として正義の闘いから始まる。この訴訟自体は和解に終わるが、その背後にあった広範な水道水の汚染をうけて集団訴訟が始まる。デュポン社の「優秀」な企業弁護士はあらゆる手段で事実を隠蔽し抵抗し、それを覆す著者の地道な戦いが続く。最後にデュポン社はこの集団訴訟に敗訴し賠償金を支払うことになった。2016 年、じつに 20 年近くの闘いであった。

この本をもとに「ダーク・ウォーターズ」の映画が製作されている。

### 研究センター11 月の予定

2 日（木）金城学院大学「協同組合論」⑥
4 日（土）難民食料支援学び語り合う会⑧
5 日（日）子ども食堂役員幹事会
6 日（月）尾張地域懇談会
7 日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑧、
　　第 6 回常任理事会
9 日（木）金城学院大学「協同組合論」⑦
10 日（金）あいち在宅懇世話人会、三河地域懇談会世話人会
11 日（土）友愛協同セミナー、協同の未来塾⑥
14 日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑨、
　　三重地域懇談会（三重のつどい）
16 日（木）金城学院大学「協同組合論」⑧
17 日（金）JCA 都道府県交流会議
20 日（月）JA 愛知東　ひだ訪問、コープぎふ団体会員懇談会
21 日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑩
23 日（木）金城学院大学「協同組合論」⑨
24日（金）あいち在宅懇総会、三河地域懇談会恵実生産者グループ訪問
25 日（土）アジアボランティアネットワーク東海世話人会、公開セミナー（組合員意識報告）
28 日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑪、くらしと平和実行委員会
29 日（水）第 7 回常任理事会
30日（木）金城学院大学「協同組合論」⑩、協同の未来塾⑦

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター
Facebook
下記 QR コードでご覧ください。
Facebook　QR コード

地域と協同の研究センター
ホームページ
下記 QR コードでご覧ください。
ホームページ　QR コード

地域と協同の研究センターNEWS 第 230 号　発行日 2023 年 10 月 25 日定価 200 円（税・送料込み）
年会費には購読料が含まれています
発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事　鈴 木 稔 彦
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通１－３９ TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail　AEL03416@nifty.com　HP http://www.tiiki-kyodo.net/